

ディケンズの分岐点

—The Chimes—

西條隆雄

A Christmas Carol (1843)から *Dombey and Son* (1846-8)にいたる年月は、Dickens が特に「時」の問題にとり組み、彼の芸術上の大きな転向期を形成している点において興味深い。¹ *Carol* 出版当時、既に連載していた *Martin Chuzzlewit* (1843-4)は、Dickens がそれまで以上に自信をこめて書きはじめた作品であったが、売れ行きはさっぱりふるわず、売れゆき不振のショックは、成功の絶頂をかける Dickens に、金銭的にはもちろん芸術家としての疑念を大きく投げかけた。その苦しみが続く中で、*Carol* が出版と同時に初版 6,000 部を売りつくしたことは、Dickens に多少なり自信を取り戻させることになった。

以後、*Dombey* の分冊出版にいたるまでの二年余りの間、彼は Browning, Tennyson, Carlyle をはじめ様々な書物をよみ、様々な構想や計画（例えば *Daily News* 創設、自作朗読）を試みている。また、この間ロンドンを離れイタリーへ旅行したことは、従来なれ親しんだ様々な場面を距離をおいてながめ、記憶の中に想像力の源泉を求める新機軸を与えることになった。*Dombey* 執筆にあたって、彼は覚書きを用意し、真剣に構想をねり、物語の心髄が失われぬよう細心の注意を払い、それでいてたえず不安と心配に脅かされつづけた。芸術家としての自信がまい戻るのは、*Dombey* の初号売上げが *Chuzzlewit* の初号のそれを 12,000 部上回った時であった。

着想も突然で、ごく短期間に構想し完成させた *Carol* ではあったが、その大きな成功によって、クリスマス読本は全国民のなじむところとなり、一年後には *The Chimes* が出、次いで *The Cricket on the Hearth* (1845), *The Battle of Life* (1846), *The Haunted Man* (1848)が出版された。これら五つのクリスマス読本は、共通して、記憶とそれが人間生活に及ぼす有益な影響を扱っている。構成、視点の模索と共に、Dickens がいかに「時」という問題に懸命にとり組んでいたかが理解できよう。

Carol が作品に時間意識を導入する新しい制作態度（心理描写への発展の可能性を含む）を開いたとすれば、次の *The Chimes* は、Dickens の社会批評の視点を形成している点で注目すべきである。*Chimes* は、*Carol* の人間肯定とはうって違って暗く、描かれた貧民の惨状は残酷でさえある。1844 年 8 月、Dickens はジェノア近くの村で構想をねりはじめ、9 月末には市内の The Palazzo Peschiere に居を移して執筆にとりかかるが、筆は一向にはかどらない。決意を新たにして机に向ったある 10 月の朝、ジェノアの鐘という鐘が、突然の風によって「狂った如く」彼の耳になり響いてきた。二日後の 10 月 8 日、彼は Forster 宛にたった一行、*"We have heard THE CHIMES at midnight, Master Shallow!"*² と書き送った。以後猛烈な勢いで Dickens は仕事にとりかかっている。

この作品は *Christian Remembrancer* (Jan. 1845) が指摘するように、Schiller の “The Song of the Bell” (1799) に見られる鐘の音のはたす役割が、Dickens にヒントを与えたのかも知れない。³ しかし作品全体の意味を考えると、真夜中に鳴る教会の鐘の音が、貧民無用論のとりこになった主人公 Toby の心に、人間としての新たな自信を回復させる点に眼目がおかれており、Schiller の影響というよりも、Carlyle の『過去と現在』に論じられている正義論⁴ が、構成においても主題においても、大きな影響を及ぼしていると考えられる。鐘は ‘heavenly Justice’、つまり形而上世界を示すものであって、その ‘heavenly Justice’ と ‘earthly Justice’ を対照させることによって、一般人民がいかにかに為政者に苦しめられているかを、貧民弁護の立場から描いているのである。

Chimes は大きな反響をよんだ。12月16日に出版されると、25日には *The Times* が、わずかの欠点はあげながらも、Dickens がこれまでと全く異なる態度をとり、おごそかな声で下層社会を代弁している点、いいかえれば、作品のもつ目的性とその力強さをほめている。また、O’Connell の機関紙である *The Northern Star* は、28日、Dickens がこれまでと比べ、はるかに人間と社会をみる見方を総合的に表現していること、そして彼が「人民の擁護者」として人民世界に登場している点を指摘した。⁵ 友人の Mark Lemon (*Punch* 編集長) と Gilbert Abbot à Beckett (*Figaro in London* の創始者) はいち早くこれを戯曲化し、出版二日後の18日には Adelphi Theatre でこれを上演し、莫大な観衆を引きつけている。⁶

Chimes が従来の Dickens の作品とは異なる点、また彼が「人民の擁護者」とよばれる理由は、この作品をかいた目的にあると思われる。その目的こそは、Dickens の後の社会像を形成する上で、大きな役割を果たしているといわねばならない。1840年代のはじめ頃、女性は子供、自分自身、時には失職した夫を養うために、一日15時間のシャツ縫い仕事をして、週給わずか7~9シリングしか与えられなかった。その極貧生活から逃れる道といえば、犯罪か死、又は救貧院入り以外になかった。当時の新聞は、絶望ゆえに犯した犯罪—自殺、放火、嬰兒殺し—に満ちており、これを読む裕福な購読者は、これを貧民の生来の邪悪さのあらわれだとか、人口過密のせいであるとみなしていた。穀物条例のせいにする人もいれば、新救貧院法あるいは封建制度の名残りだと考える人もいたが、大多数の人々は、貧民の存在をけしからぬ迷惑だと考えていた。⁷ 事実、この時代の一般的風潮をとらえ、*Punch* は次のようにのべている。

The vice of the age is a want of sympathy with the condition of the great mass of people. They are looked upon as the mere instrument of wealth—the mere machines with eyes to direct them and limbs to labour for the privileged classes.⁸

Chimes は、この社会風潮を正確にとらえ、貧民のために「一大鉄槌」⁹をふりおろした。それゆえ「一大鉄槌」をめざすこの作品が、終始政治諷刺に徹しているのは当然であろう。

Chimes が歓迎をうけた理由として、時代の別の風潮を考えてみる必要がある。1840年代のはじめには、貧民の惨状を国家の良心に訴える作品を迎え入れる準備ができていたようだ。1841年に創刊された *Punch* は、一貫して虐げられた人々を擁護し、為政者を過激なまでに調刺し攻撃することを、その信条としていた。その *Punch* に、Douglas Jerrold は1843年1月から12月にかけて、“The Story of a Feather” を連載した。この作品は、*Almanacks* を除けば、*Punch* がそれまでに記録した最高の成功作であり、その「同情と思いやり(sympathy and tenderness)」の調べが、雑誌の読者を急速に広げた。Dickens はこの作品を熱心に読み、深い感銘を覚えている。¹¹ この物語の一部は、やがて *Chimes* の中で、より劇的な場面を展開することになる。

この「同情と思いやり」の調べを一段と高めた作品は、Thomas Hood の“The Song of the Shirt”であろう。既に3つの新聞が断ったこの小品を、Mark Lemon はスタッフの反対を押切り、*Punch* のクリスマス特集号(1843年12月)にのせた。その反響はすさまじかった。この詩は野火の如く英国中を駆けぬけ、*Times* をはじめ各紙がこぞってこれを取り上げたので、またたくうちに国中の話題をさらうことになった。¹² *Punch* の売上げは、これを機に一挙に3倍にふえた。¹³

針子の哀れさは、この詩を契機に文学や絵画の中で扱われるようになるが、当時センセーションをまきおこしたこの詩の調べは、*Chimes* の中に脈々と流れる。Meg と Lilian の針仕事の辛さを描く場面は、この詩がそのまま入りこんできた感じさえ与えている。加えて、この詩の掲載により、「同情と思いやりの調べをもつ、深刻で哀感を誘う記事は、クリスマス特集号にそぐわぬものではない」との考えが広く定着した。*Chimes* の成功は、同情を喚起する当時のいろんな作品、出来事をうまく融合させている点にも、その一因がみられるのである。

II

The Chimes は、Carlyle の述べる ‘Justice’ と ‘Evil thing (=Injustice)’ を二大対立概念として、その根底に組み入れている。開巻早々に出てくる教会の鐘は、Toby にとっては実に「神秘的」な存在であって、ふだんは空中はるか彼方から力強い旋律を運んでくるが、意気消沈した時には、希望と激励を携えてくる。この天空の存在は、作品中、正義、真実、永遠といった価値をもつものとして構想されており、Dickens はその鐘と、地上の心なき為政者—Sir Joseph Bowley、市参事会員 Cute 及び功利主義を奉ずる取りまき連中—の貧民に対する数々の虐待とを対比し、それによって為政者を咎め、貧民に対してのみ厳罰を科する社会のしくみの欠陥を責めている。

60歳余りの公認配達人である Toby Veck は、善意と仕事熱心にかけては誰にもひけをとらない。だが、この善意あふれる貧しい主人公にとって、現実世界は厳しく残酷である。その厳しい現実世界は、まず、新聞という形で作品中にあらわれる。Toby の口から「新聞」という語が出たとたんに、彼の顔は自己卑下にくもり、心は暗転する。何故なら、新聞は

貧民の暗い記事で埋めつくされており、それを読む Toby は、“what we poor people are coming to”¹⁴ との疑念をぬぐい去ることができないからである。貧民はまともな道を歩くこともできなければ、貧民をまともな道に引き戻すこともできぬらしい。この世に用はないのかも知れぬ、用もないのにこの世に侵入してきているのにちがいない。自分たちはおぞましいもの、厄介者、不平の種であり、たえず警戒されているのだ、と考える。

その新聞はきまって作品の明るい場面に出てきて、高揚した Toby の心を失望へと落下させる。それは、まるで貧民の惨状から目をそらすことはできぬと言明している如くである。William Fern とその姪に一夜の宿を提供する時の、Toby の揚々たる気持は、新聞を広げることによって暗澹たる現実を引き戻されているし、作品の最後で、夢から醒め、新年の鐘の音をきいた時にも新聞は Toby の足にからまっている。

暗澹たる現実を作り出しているのは、為政者の貧民に対する態度であろう。Toby が‘tripe’のごちそうに心を踊らせながらも、娘 Meg の結婚に関して沈む気持をおさえている時、三人の為政者—市参事会員 Cute、万事を統計と数字で処理する Filer、それに恰幅のよい、赤ら顔の英国青年党の一員—が現われる。貧民の生活苦には一向に関心をもたぬ人々である。

‘tripe’を一目みるなり Filer は、それが英国市場で最も不経済な食物で、これを煮た場合に生ずる損失は、他のいかなる動物の肉よりも 1 ポンド当り 5 分の 1 の 8 分の 7 だけ多い、と数学的に論証する。彼はその計算を更におしすすめ、“a February over”（「余り 28 日」）などと数値をもて遊んだかと思うと、Toby が寡婦と孤児の口から tripe を盗みとる泥棒であると、いとも簡単に数学的に証明するのである。彼の「極度の近視」(94) は、数値による抽象のみを重視し、人間の感情などは考慮の対象にならぬことをあらわしているのであろう。この功利主義論者にかかれば、貧乏人の結婚無用論、生存無用論は「数学的明証」(98)となる。そして、Toby の年齢は、“past the average” (100)、つまりとっくに死んでいなければならぬ年齢だといひ放つ。

市参事会員の Cute は、Filer の論述を大いに喜んでいる。そして Richard と Meg を前にして、彼は結婚の無用と結婚生活の悲惨な結末を説き始める。彼にとって、貧民の結婚の行きつくはては自明なのである。しかし、Cute を描くに当り、Dickens は Carlyle の‘Justice’論を巧妙に用いている。

But every body knew Alderman Cute was a Justice! Oh dear, so active a Justice always! Who such a mote of brightness in the public eye, as Cute! (98)

‘heavenly Justice’にはほど遠く、貧民には残酷な判事に、Justice（「正義」）の名が冠せられているのである。また、‘a mote in the eye’の含蓄する意味を考えると、人民のごく小さいな罪をみつけては、これを厳罰に処している人物であることも明白であろう。彼は表面こそ‘Justice’ではあるが、公正な目でみれば‘Injustice’に他ならない。この判事は、

貧民の生活苦ゆえに生じる悲惨な結末は、すべてこれを禁じ、中でも自殺はこれを最も固く禁止する。

自殺禁止を得々と語る Alderman Cute のモデルは、かつてロンドン市長をつとめ、当時ミドルセックスの判事をしていた Sir Peter Laurie である。¹⁵ Sir Laurie は、判事席で毎日目にする悲惨と自暴自棄の例を前にして、片時もこやかさを崩さず、庶民のことは用いて親しく語りかけた。それ自体非情な光景であるが、とりわけ彼の自殺禁止令の冷酷さが、Dickens に激しい諷刺を書かせることになった。

そしてまた、赤ら顔の紳士は、何の哲学的背景ももたず、単なる過去賛美をくり返すだけで、現実世界の貧困から目をそらしているのである。これら為政者の無視とあざけりに会って、Toby は人間としての尊厳を完全に失い、貧民には善性のかけら一つ見出せなくなってしまう。そしてその瞬間に、耳傾ける人にはどんな激しい風に逆らっても、“cheerful notes” (82) を送り届け、希望を運ぶ鐘の音が、彼には三者のスローガン、“Put'em Down!”、“Good Old Times!”、“Facts and Figures!” に変じてしまうのである。

鐘の激励から、また悠久の声から切断された Toby は、つづいて別の為政者に翻弄される。「貧民の友であり父」であると自称する国会議員 Sir Joseph Bowley は、年末には人間関係を含め、あらゆる貸借関係を清算して新年を迎える人である。見るからに有徳人の典型の如く、彼は貧民庇護の朗々たる雄弁で Toby を感激させる。しかし、“floundering now and then, as in the great depth of his observations” (104) と表現され、自分のこと、自分の貸借勘定、自分と銀行家との関係を力説するところをみると、この人物もまた表裏に大きな相違のあることがわかる。事実、次のことばには、貧民の庇護ころか、搾取者の心情が明白である。

“You needn't trouble yourself to think about anything. I will think for you; I know what is good for you. Now, the design of your creation is—not that you should swill, and guzzle, and associate your enjoyments, brutally, with food;...but that you should feel the Dignity of Labour. Go forth erect into the cheerful morning air, and—stop there. Live hard and temperately, be respectful, exercise your self-denial, bring up your family on next to nothing, pay your rent as regularly as the clock strikes, be punctual in your dealings....(106)

彼はドーセット州の大地主であり、国会議員である。彼の小作人に対する根本的態度は、彼等の意志、感情を無視し、自分の意のままに従えることである。彼は、“entire Dependence” (106) が最高の徳目であると強調する。夫人に至っては、貧民軽蔑はむき出しで、小作人に冬の夜鍋仕事を教える時などは、領主一家を讃える歌に旋律を施し、封建思想を徹底的に浸透させるしまつである。

以上にみるように、国会議員から下々の為政者に至るまで、苦しめる民に対する同情と

理解はどこにも見出せない。この状態は、そのまま 1840 年代当初の英国社会の姿でもあった。この現実から逃れる術はあるのか。貧富に二分した現実の中で、貧民には何らかの救いがあるというのか。それとも貧民は本当に生来邪悪で、この世に生きる資格がないのであろうか。絶望の底につき落とされた Toby は、まるでその意味を問うかの如く、天空へと深夜の鐘楼を昇ってゆく。それはまた、為政者に強要された思考の枠内をぬけ出し、真実・永遠の世界を求めてゆこうとする精神の姿でもあろう。

作品は、Toby の現実世界と夢の世界に二分している。そして後者—夢の世界—において、Dickens は貧民の中に宿る善性を追い、一方為政者の虚偽のヴェールをはくことにより、Toby を否定から肯定へ、精神的な死から生へと蘇生させるのである。

鐘楼で卒倒し、そして目ざめた Toby は、無数の鐘の精霊が様々な働き—慰め、鞭うち、怒号、奏楽、激励—を司どっているのを見る。精霊は、悠久世界から地上の人間の諸々の営みを采配するものとして登場しており、地上における正、不正、喜悦、苦悩、悲哀といった全事象に目をとめている。おびたしい精霊の中でも、とりわけ身の丈幅ともに大きな精霊が、重々しい声で次のように語る。

“The voice of Time...cries to man, Advance! Time is for his advancement and improvement; for his greater worth, his greater happiness, his better life; his progress onward to that goal within its view, and set there, in the period when Time and He began...(123)

これは、Toby の無意識の底にある、鐘に対する不変の信頼が強烈な言葉となってあらわれてきたと解釈できるであろう。そして同時に、Reform Bill (1832) を経験した Dickens にとって、人類の進歩と向上は強い理想となり信念となって、生涯彼の心に焼きついていた事実も、見落すことはできない。

精霊の言葉の中で、“Time” は “Heaven and Man”, “Eternity” と同格で用いられている。¹⁶ つまり、「時」は「破壊者」及び「啓示者」としてではなく、「創世のはじめから定められている」正義、永遠、真理として把握されている。現実世界の不正に対立する悠久世界の表象である。

この悠久世界の使者に案内されて、Toby は貧民、とりわけ彼の愛する人々の貧窮の極限を目撃する。まずあらわれるのは、成長した Lilian と Meg が何の家具調度品もない部屋で、刺繍に精出す姿である。目の輝きは消え、顔つやも希望も失せてしまった Lilian は、針仕事の辛さをこうのべる。

“Such work, such work! So many hours, so many days, so many long, long nights of hopeless, cheerless, never-ending work—not to heap up riches, not to live grandly or gaily, not to live upon enough however coarse; but to earn bread; to

scrape together just enough to toil upon, and want upon, and keep alive in us the consciousness of our hard fate!...” (127)

前年のクリスマスに出版された “The Song of the Shirt” が、その悲しみの調べを伴って、読者の胸に強烈に甦ってくる。¹⁷ 生活苦にうちのめされた Lillian の脳裏には、“dreadful thoughts” (127) が去来する。倫落の予兆であることはいうまでもない。

数年後、Meg は一層佗しい屋根裏部屋で針仕事にいそしんでいる。生活苦でやせ細ってしまったにもかかわらず、深夜をすぎて仕事はまだ終わらない。“In any mood, in any grief, in any torture of the mind or body, Meg’s work must be done” (136). 仕事はいつ果てるともわからない。針子の悲哀は *Parliamentary Papers* にも、又 *The Times* の記事にもみえる。“The Song of the Shirt” が出版されて 6 ヶ月後、画家の Richard Redgrave は *The Sempstress* (1844) を描き、これを王立美術院の展覧会に出品して大反響をよんだ。一つには、社会的テーマに近代都市における殉教者のイメージが重ねられ、美と感傷が同時に喚起されたからであった。以後、針子のテーマは根強い伝統となっており、ヴィクトリア朝時代を絶えることなく、絵画世界の中で継承されてゆく。¹⁸

針仕事に余念のない Meg を、かつての恋人 Richard が深夜訪ねてくる。彼はアル中になり、やつれ、髪はバサバサで、髭もそらず、目は輝きを失って、口元には白痴のようなくす笑いを浮かべている。彼の用向きは、Lillian からことずかったお金を Meg に手渡すことであった。だが、この日もまた Meg はこれを拒んだ。この拒絶が Lillian を死の間際まで苦しめつづけていたのであろう。死の訪れる直前に、彼女は Meg のドアを叩き、彼女の前にひざまずき、自分の犯した行為の許しを乞う。彼女は自らの倫落を告げるとともに、キリストである Meg の慈悲にすがっているのである。

“Kiss me once more! He suffered her to sit beside His feet, and dry them with her hair. O Meg, what Mercy and Compassion! (137)

Meg は、既に初登場の場面で神格化されているが、この場面ではキリストにたとえられている。一方、Lillian はマグダラのマリア (Luke, 7:38) のイメージで描かれ、¹⁹ 悔俊による人間復帰がなされている。針子の運命は、働いて益々窮乏し、餓死においやられるか、あるいは Lillian の如く倫落してゆく以外にはないのであろう。この悲しむべき運命の中にあつて、Meg も、そして臨終の Lillian もまた、人間性を喪失してはいないのである。

次いで Toby の夢には、Bowley 邸における新年祝賀の場面があらわれる。Sir Bowley は小作人と “Skittles” (「九柱戯」) のゲームをすら行う予定にしている。この遊戯は、中世における領主と小作人との理想的な結びつきを象徴するもので、この時期、中世に理想を求めた Disraeli, Manners 及びその信奉者達は、「男性的スポーツと遊戯」を強調し、貴族仲間にクリケットクラブの創設を説き、英国中至るところを訪ねては労働者と多彩な競

技に熱中していた。だが Dickens は、中世を迷信、野蛮、疾病、社会不正の時代とみなしていたので、英国青年党の運動には同調せず、むしろあざけりの態度を抱いていた。²⁰

年に一度、地主と小作人が一堂に会し「労働者に乾杯をあげる」誇らかな儀式のまっ最中、何かにつけて犯罪人扱いされる William Fern が登場する。震えるしわがれ声で、彼は追いまわされた激浪の生涯を語り、法は貧民を“trap and hunt” (132) する為に作られていると結論する。Fern の登場により、地主と小作人との理想的な関係は名ばかりで、実際には農場で飢え死のうとしている労働者に対しては、何一つ心ある配慮が払われていないことがわかる。Fern は、貧民を人間らしく、まともに扱ってほしいと訴える。人民は忍耐強く、平和を好み、喜んで苦役にも従うが、虐待に虐待を重ねられれば、やがては聖書のことばですら、以下のように、逆の意味を語るであろうと警告する。

“Whither thou goest, I can Not go; where thou lodgest, I do Not lodge; thy people are Not my people; Nor thy God my God!” (133)

社会不正への怒りと共に、革命の予兆さえ含んだ言葉である。当時は、チャーティスト運動が 1839 年には 125 万人の署名を集めて選挙法改正を提訴し、却下されたあと、1842 年には更に大規模な提訴を議会に送っている。Disraeli が *Sybil: or The Two Nations* を書き、二国民の対峙を描くのは 1845 年である。また、Thomas Hood は“The Lay of the Labourers” (1844) の中で、パンは高く、農場には仕事がなく、冬は厳しく天候不順で、この年農村地帯の生活は極度に苦しく、放火が相ついだ事実を記している。そして *Annual Register* (1844) によれば、1843 年の放火件数は、過去数年間と比べて、二倍またはそれ以上を記録している。事実、Fern のことばには、当時の社会不安の中でうずまく民衆の憤りの声が反映されているといってもよいであろう。そして Fern 自身、貧苦との闘いの唯一のはげ口として、ついには放火を決意するのである。

一方、零落した Richard を立直らせる唯一の方法として、彼と結婚した Meg は、夫に他界される。そして残された赤ん坊にも、運命の手は残酷にのびてくる。放火を決意した Fern が、最後の別れに Meg を訪れた時、赤ん坊を腕にとった彼は突然、「母親が死んだ時の Lilian の顔そっくりだ」と叫ぶ。この瞬間、彼女は娘の将来を知った。声はうわずり、涙が頬を流れ、愛情には陰しく恐ろしいものが混じる。翌大晦日、彼女はぼろ服とはいえ赤ん坊に入念に着つけをし、真夜中まで仕事をさがし続け、あげくのはては救貧院の保護を受けようとさえ試みる。それも甲斐なく、寒風の中をめまいさえ感じながら宿に帰る。だが、非情そのものの宿の主人は、彼女に門を閉ざす。

空腹と絶望、加えて娘には Lilian の運命が待ちうける。Meg は意を決して暗い道を河へ向かって走る。子供を思う母情の激しさは、いたいたしいほど美しく描かれている。自分のみすばらしいショールをはずし、それで娘をしっかりとくるみ、娘の手足をのばし顔を整え、衣服を整える。苦しみをおし殺し、子供に最後のキスをする。投身自殺の厳粛な準

備を終えた彼女は、暗い水面へとおりてゆく。

投身寸前で Toby は夢からさめる。最愛の娘の貧困と絶望、そしてそれにもかかわらず我が子に対して抱く美しい母情をみて、彼の健全な魂は完全に甦える。彼は貧民罪惡説をかなぐり捨て、これまでそれを信じた自分のおろかさを神に謝する。いまや彼は「鐘の精」をしかと見た。そして「時」(正義・真実)は、貧民をみすてぬことを知り、自分及び貧民階級に対する自信を取り戻すのである。

I know that our inheritance is held in store for us by Time, I know there is a sea of Time to rise one day, before which all who wrong us or oppress us will be swept away like leaves. I see it, on the flow! I know that we must trust and hope, and neither doubt ourselves, nor doubt the good in one another...(151)

これは、当時の貧民蔑視の中における、強烈な貧民弁護である。Dickens は、Toby を通じて、虐げられた人々の心に、自尊の念を、一人間であるとの確信をめぐめさせた。作品の最後で新年の鐘が鳴り響いているのは、作家の人間性に対する、ひいてはこの地上に対する力強い信念の表明でもあろう。

しかし、“voices in the clouds” (109) と表現された鐘の音は、あくまで作品の形而上世界を暗示するにとどまり、Toby に働きかけ、クリスマスのアレゴリーを作りあげるには至っていない。作品の主眼は、やはり社会不正に対する怒りにおかれているといえるであろう。Wagenknecht によれば、²¹ この作品の最もおどろくべき点は、Dickens が多くの犯罪—売春、アル中、殺人、放火、革命—は、社会の構成員のある部分が、人生のまともなくらしに十分あずかり得ないゆえに生じる、と断言している点にある。つまり、作家の社会をみる視点は、為政者の貧民に対する理解の欠如であると明確に示している点にある。

例えば、Cute などは、自ら固く禁じている自殺を友人の Deedles が犯したことを聞いても、‘a most respectable man’ (129) とくり返すばかりで、その非を責めようもしない。‘respectable’ という語を、短い会話の中で 4 回も用いる彼は、「偉い人物の集まる場所、必ずや偉大なる魂の内に存する共感に引かれて、Cute がいる」(128) と描かれている。つまり彼は、こび諂う人物であり、事を裁くに当って、一階級の思惑のみを考える人物であろう。“Balance those scales” (129) と激しい語気で手落ちを責める作家の声は、作品の基調をなしているといえるであろう。

万事につけて富者にのみ都合よく、大多数の苦しめる人々に対する思慮に欠ける、この根本的不正の是正こそは、Chimes のかけげる高邁な目的であったろう。功利主義を奉ずる能吏達の操るままになり、真理・永遠の世界から切り離されてしまえば、Toby の如く貧民階級は生存無用論を遮二無二おしつけられてしまうのだ。Chimes は感傷的な人間肯定では終わっていない。社会意識の是正を真剣に求めているのである。結びの句にそれがあ

りありと見える。

Had Trotty dreamed? Or, are his joys and sorrows, and the actors in them, but a dream; himself a dream; the teller of this tale a dreamer, waking but now? If it be so, O listener, dear to him in all his visions, try to bear in mind the stern realities from which these shadows come; and in your sphere—none is too wide, and none too limited for such an end—endeavour to correct, improve, and soften them.(154)

注

- 1 Kathleen Tillotson, "The Middle Years from the *Carol* to *Copperfield*," *Dickens Memorial Lectures 1970* (London: The Dickens Fellowship, 1970), 5-19.
- 2 2 Henry IV, III, ii, 228-9.
- 3 Philip Collins ed., *Dickens: The Critical Heritage* (London: Routledge & Kegan Paul, 1971), p.161. シラー「鐘によせる歌」『世界名詩集大成』6 (ドイツ 1) 東京:平凡社, 昭和 45 年, 135-40 頁.
- 4 Robert L. Tarr, "Dickens' Debt to Carlyle's 'Justice Metaphor' in *The Chimes*," *Nineteenth-Century Fiction*, 27(1972), 208-215.
- 5 *Dickens: The Critical Heritage*, pp.154-58.
- 6 F. D. Fawcett, *Dickens the Dramatist* (London: W. H. Allen, 1952), p.82.
- 7 "It is a wise and beautiful book, I am sure I may venture to say to you, for nobody consulted it more regularly and earnestly than I did, as it came out in *Punch*," (Letter to Douglas Jerrold, May 1844, Letters, IV, p.120)
- 8 M. H. Spielmann, *The History of "Punch"* (London: Cassell & Co., 1895), p.332.
- 9 *Ibid.*, p.333.
- 10 Charles Dickens, *The Chimes in Christmas Books*, Oxford Illustrated Dickens (London: Oxford University Press, 1966), p-87. Subsequent quotations are from this edition, indicated in parentheses by page number.
- 11 Philip Collins, *Dickens and Crime* (London: Macmillan, 1966), p.184. Sir Peter Laurie が実際に 'put down' という語句を用いたかは未定であるが, おそらく *Punch* の創作であろうと Collins 教授は推察している (p.186)。その Laurie は, 命令強化により自殺件数を激減させ, *Illustrated London News* (Jan.21, 1843) はその功績を讃えている。
- 12 Michael Slater, "Dickens's Tract for the Times," *Dickens 1970*, ed. M. Slater (London: Chapman and Hall, 1970), pp.99-100.

- 13 *Punch*, 2 (1842), p.210.
- 14 “I have more and more my notion of making in this little book a great blow for the poor.” (Letter to John Forster, 8 October 1844, *The Letters of Charles Dickens*, IV [Oxford: The Clarendon Press, 1977], p.200)
- 15 Spielmann, p.290.
- 16 例えば,次はその一節である。
 “O! Men, with Sisters dear!
 O! Men! with Mothers and Wives!
 It is not linen you’re wearing out,
 But human creatures’ lives!
 Stitch-stitch-stitch,
 In poverty, hunger, and dirt,
 Sewing at once, with a double thread,
 A Shroud as well as a Shirt. *Punch*, 5 (1843), p.260.
- 17 T. J. Edelstein, “They Sang ‘The Song of The Shirt’: The Visual Iconology of the Seamstress,” *Victorian Studies*, 23(1980), 183-210.
- 18 “Who turns his back upon the fallen and disfigured of his kind...does wrong to Heaven and Man, to Time and to Eternity...” (The First Edition)
- 19 Douglas Jerrold は, “The Story of a Feather” のはじめの部分で, 針子(Patty) と売春婦 (Jessy) をキリストとマグダラのマリアのイメージで描いている (*Punch*, 4 [1843], p.84). *Chimes* におけるシチュエーションは, 多分ここにヒントを得たのであろうと M. Slater は指摘する (“Carlyle and Jerrold into Dickens: A Study of *The Chimes*,” *Nineteenth-Century Fiction*, 24 [1970], 525-6)。
- 20 M. Slater, “Dickens’s Tract for the Times,” pp.110-3.
- 21 Edward Wagenknecht, *Dickens and the Scandalmongers: Essays in Criticism* (Norman: University of Oklahoma Press, 1965), p.64.

* * * * *

ABSTRACT

Dickens's Turning Point—*The Chimes*

Takao Saijo

In the years from *Carol* to *Dombey*, Dickens was uncertain of his sense of artistic security. But these years were most fruitful in his attempt to grope for a new way of writing that would bring about more clarity of direction. His Christmas books written during this period show how deeply he was involved with the treatment of time, as well

as coherence and point of view.

A Christmas Carol reflects much of the novelist's early vein: there is in it a cheering suggestion that a wholesale change in human nature is possible. But *The Chimes*, published a year later, is different in theme and tone from its predecessor. It is deeply concerned with the miseries of the people in the early 1840s, and in it Dickens strikes "a great blow for the poor" against the general air of the age, characterized as "a want of sympathy with the condition of the great mass of people." Contemporary reviewers praised *The Chimes* by saying that "Dickens becomes the *serious* advocate of the humbler classes," and that he "enters the public arena as *the champion of the people*." What these reviewers mean is that Dickens's view of man and society in *The Chimes* marks a great change from that in works published before. His social criticism, which is to be fully developed in his later novels, takes a clear form in *The Chimes*.

Dickens's point of view clearly illustrates that it is society, not the poor, that is to blame. He attempts to set right in the novel the social injustice in which the poor and the suffering are maltreated. By polarizing "heavenly Justice" and "earthly Justice"—ideas borrowed from Carlyle's *Past and Present*—Dickens satirizes the utilitarian administrators such as Sir Joseph Bowley and Alderman Cute, by neatly exposing the malicious motives buried behind their smiling surface or sonorous oratory.

The plot of the novel develops as Toby's thoughts are darkened first by the news of the people and then by the bullying and rallying of those administrators. But the chimes, which represent the world of truth and eternity, beckon him to come near them and save his soul from falling into the consciousness that the poor are intruding and have no business on the earth. There are many references to contemporary events and literary pieces that appeal to the reader's sympathy and heighten the emotional tone of the novel. Success of *The Chimes* depends much on this, but the hero's renewed belief in himself and his class, at the end of the novel, is rendered sombre by the author's criticism of society which only seems to exist for the rich. *The Chimes* does not take the form of a Christmas allegory. It is a serious work of art which foretells the coming of his great social novels.

『英語英文学研究』(広島大学)第25巻別冊(1981年4月)